

平成 27 年度  
第 3 回酒田市総合教育会議  
議事録

平成 27 年度 第 3 回酒田市総合教育会議

1 日 時 平成 28 年 2 月 18 日 (木) 開会 : 13 時 00 分 閉会 : 14 時 50 分

2 場 所 酒田市役所 3 階 第 2 委員会室

3 出席者

(構成員) 酒田市長 丸山 至  
酒田市教育委員会  
教育長 村上 幸太郎  
委員 浅井 良  
委員 齋藤 義明  
委員 國眼 真理子  
委員 岩間 奏子

(オブザーバー) 酒田市副市長 矢口 明子

(事務局)	総務部長	本間 匡志
	企画振興部長	中川 崇
	教育部長	大石 薫
	教育委員会管理課長	桐澤 聡
	教育委員会学区改編推進主幹	大沼 康浩
	教育委員会学校教育課長	今野 誠
	教育委員会指導主幹	齋藤 司
	教育委員会社会教育課長	清野 誠
	教育委員会図書館長	阿部 博
	教育委員会管理課課長補佐	長村 正弘
	教育委員会管理課管理係長	関口 誠

4 傍聴者 2 名 (報道関係者 2 名)

5 協議事項

(1) 本市の教育を取り巻く諸課題について

(2) その他

6 議事経過の概要

次のとおり

## 1 開会

(大石教育部長)

それでは、ただ今から平成 27 年度第 3 回酒田市総合教育会議を開会いたします。本日の会議の進行を務めさせていただきます教育部長の大石です。どうぞよろしくお願いいいたします。本日は、2 名の方から取材の申し込みをいただいておりますのでご報告いたします。最初に丸山市長からごあいさつをお願いします。

## 2 あいさつ

(丸山市長)

それでは、教育委員の皆さまご苦勞さまでございます。私にとっては 2 回目の総合教育会議でございます。岩間委員は初めてですね。どうぞよろしくお願いいいたします。総合教育会議については、非常に大切な会議と思っております、引き続き活発な議論をこの場でしていただければありがたいと思います。今日は、新たに就任いたしました副市長にも同席をお願いいたしました。市長部局の部長や課長も含め、いろいろと教育について意見交換ができればと思っております。さて、昨日のこととなりますが、記者会見をさせていただきました。平成 28 年度の予算案がまとまりまして、酒田市として来年度こういったことに力を入れるのだということ記者発表させていただきました。私としては、教育部門にできる限り力を注ぎ、村上教育長はじめ教育委員会委員の皆さまの意見を取り入れた予算としたつもりではありますが、引き続き、皆さまの意見を踏まえ改善できるところは、改善してまいりたいと思っております。今日はその中身についてもいろいろと話題になろうかと思いますが、いずれにしても、人財、材料ではなくて財産のほうの人財と意識的に使わせていただきますけれども、次の世代を担う子どもたち、まさに原石ですが、原石のままでは光りません。やはり磨かないとだめなのです。磨くために我々行政あるいは教育委員会さらには地域、家庭がどのように子どもたちに接するべきか、そういったことを大事にしていきたいと思っております、財産の財という漢字をあてるためには、光り輝かなければ意味がない。原石のままでは、材料の材なのだろうと思いますので、この地域の次の時代を背負う若い人たちが、財産となって輝くような、そういった教育行政でありたいと思っておりますので、皆さまからもお力添えを賜りたいと思っております。今日はどうぞよろしくお願いいいたします。

(大石教育部長)

ありがとうございました。続きまして、村上教育長からご挨拶をお願いします。

(村上教育長)

こんにちは。教育委員会を代表いたしまして、ご挨拶を申し上げたいと思います。丸山市長におかれましては、お忙しい中、総合教育会議を開催していただきましたことにお礼を申し上げたいと思っております。これで今回 3 回目となるわけですが、これまでの総合教育会議を振り返ると、非常に有意義であったと心から思っております。今後の酒田市の教育の方向性について、高い理想を掲げるとともに、現実的にどんなことをやっていこうかという、そういったレベルにまで掘り下げて話し合いを持つことで、これまで話題になったことが現実となってきているということを感じております。前回の学力向上の話題についてもそうで

したけれども、具体的な施策として予算に反映していただいておりますし、組織の機構改革の件についても、市長から意見を求められ現実味を帯びてきているということからも、実質的にはこの会議の狙いである市長部局と教育委員会との良い意味での強い連携ということに非常に効果がある会議であると思っております。また、平成28年度の予算につきましては、教育支援員の配置の拡大について丸山市長から決断していただいたことについて、改めてお礼を申しあげたいと思います。この情報は、県内の教育委員会に伝わっておりまして、私が全県の教育長会議に出席しており、矢継ぎ早にどうしてそのようなことが可能なかと受けるほどでございました。このように非常に注目を浴びているところではございますが、私としては、当然より良い授業のあり方を検討していかなければならないと思っております。それから、今回協議する東北公益文科大学との連携につきましては、非常にタイムリーな話題になったのではないかと思います。これは教育だけの問題ではなく、全体として大学まちづくりという大きな枠組みの中で、教育とどういった連携が図れるかということのをこれから協議していくという点が大切な話題でないかと思っております。このたび矢口副市長からもご出席いただきました。本当にありがとうございます。矢口副市長には、教育に関する事務の管理及び執行状況の点検評価の外部評価者として、貴重なご意見を賜ってまいりました。今日の会議におけましても、貴重なご意見をいただけるのでないかと考えているところで大変うれしく思っているところでございます。これからも市長のめざす人財育成の達成に向けて、市長部局と連携しながら取り組んでまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(大石教育部長)

ありがとうございました。市長のあいさつでもお話がありましたが、本日は矢口副市長にご出席をいただいております。また、教育委員会の岩間奏子委員におかれましては、昨年11月に教育委員会委員に任命され、初めての総合教育会議となります。どうぞよろしくお願い申し上げます。それでは、これより協議事項に入りたいと思います。ここからは、市長に座長をお願いいたします。発言の際には皆さま座ったままでお願いいたします。よろしく願いいたします。

### 3 協議

(丸山市長)

それでは、この協議に入ります前に、副市長も初めてで、岩間さんも初めてですよね。一言ずつご挨拶をいただいでよろしいでしょうか。副市長よろしく申し上げます。

(矢口副市長)

座ったままで失礼します。矢口でございます。先週の金曜日に就任したばかりで、その先日まで今日のテーマにあります東北公益文科大学で行政学を教えておりました。また違った立場になったわけですが、一生懸命やっついていこうと思っておりますのでよろしく願いいたします。

(丸山市長)

岩間委員お願いいたします。

(岩間委員)

私も座ったままで失礼します。昨年の11月に教育委員会委員として就任しました。全く自分の子育てもままならず、委員という立場としては足りないところが多々ありますけれども、この春から下の子が中学2年生になりますし、そういったところもあわせて、私が今までしてきた経験が何かの役に立てるのであれば、一生懸命酒田市の教育のために力を尽くしていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(丸山市長)

よろしくよろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。それではさっそく協議事項に入らせていただきます。協議事項の1は、本紙の教育を取り巻く諸課題についてということで、3つほど項目があるようでございますので、まずは一括して事務局から、ご説明をお願いいたします。

(企画振興部長)

企画振興部長の中川と申します。私から、資料の1酒田市と東北公益文科大学との連携について説明をさせていただきたいと思っております。ご覧のように、東北公益文科大学につきましては、副市長からもお出でいただいているところです。酒田市にある高等教育機関としてまたその設置者の一つとして、市政を進めるにあたり、その活動を地域づくりまたは人材育成にこれからも引き続き活かしていきたいと考えているところでございます。近年の連携の実績でございますが、はじめに大学まちづくり地域政策形成事業でございます。この事業につきましては、政策課題を検討、解決するための調査研究事業を大学と連携して取り組んでいるところでして、平成18年度から実施しております。この10年間で20件の調査研究を公益大にお願いしているものであります。今年度につきましては、こちらの2件をお願いしているわけですが、平成20年度から5か年で実施いたしました飛島未来プロジェクト事業を企画しまして、飛島における若者の様々な活動の展開につながっているところでございます。(2)でございますが、グローバル・セミナーを通じた酒田市グローバル人材育成の仕組みづくりに関する調査研究ということにつきましては、今年度、庄内地域の高校から57名の参加をいただきまして、合宿形式で英語のセミナーを試行的に実施したものであります。後ほど、28年度の取り組みでも説明させていただきますけれども、継続的に実施をすることでグローバル人材の育成を進めてまいりたいと考えているところでございます。次に、公益大生への支援という観点から2点ほどでございます。公務員志望学生に対する支援、それから学生の街なか活動の促進というところでございますが、前段の公務員志望学生に対する支援として、庄内総合支庁と庄内の2市3町が連携をして、公務員志望学生に対して先輩公務員がアドバイスをするワークショップの開催をしております。また、街なか活動の促進につきましては、公益大生の街なかでの活動を促進するために、現在運航しておりまするんバスの利用に対する支援を行っているところでございます。一番下のコワーキングスペースアンダーバーの設置運営でございますが、これにつきましては、起業家養成プロジェクトの一環として、今年度6月に、IT起業家の育成を目指したコワーキングスペースアンダーバーを公益ホールに設置したところでございます。コワーキングスペースとは、自由にそこで仕事をしていただいたり、または同じ仕事をする仲間同士が、お互いいろいろな情報交換をしたりしなが

ら高めあっていく、自由に使える場として公益大にも運営をお願いしております。12月末現在47名の会員登録がありまして、既存のIT起業家グループと連携した自主勉強会の開催など会員同士のネットワークづくりの取り組みが始まっていると伺っているところでございます。続きまして、平成28年度から実施する新たな取り組みでございます。昨年10月に策定をいたしました酒田市のまち・ひと・しごと創生総合戦略の基本目標の1つに、つながりと安心にあふれた住み続けたい酒田をつくるという項目がございます。この中に、東北公益文科大学と連携したまちづくりの推進を掲げております。また、酒田市の平成28年度当初予算におきましても、東北公益文科大学と連携したまちづくりの推進を主要な取り組みの項目としているところでございます。先ほどご説明しました平成27年度の事業については、継続して実施してまいりますが、更に連携を強化しながら取り組みを進めていきたいと考えております。まず、1番目の公益大卒業生の定住促進に向けた取り組みでございます。これは公益大生が、卒業後も酒田市にそのまま居住し就業していただく場合に、大学時代に借りていた奨学金の一部について返還の支援を行うものでございます。具体的には、返還が開始されてから3年間酒田市に居住し、就業している場合に月15,000円を上限として、市がその返還を支援するものです。最大ですと540,000円ほどになります。参考として、山形県と連携した若者定着支援という項目がございますが、これにつきましては県と県内市町村が連携し、奨学金の返還支援を行うという制度でございます。この制度につきましては、高校時代に酒田市に居住していた人が、大学卒業後に酒田市に戻り3年間住み続けていただくと3年経過後に一括して支援されるというもので、県の場合ですと1,200,000円ほどの支援となるものです。酒田市の先ほど申し上げました単独の制度につきましては、就業後のまだ給料が低い時の負担を減らしたいということと、公益大生に限定するというところで、酒田市民、高校時代酒田にいなかった方も対象にし、定住促進という意味合いと公益大卒業生の方に酒田市で活躍をしていただいてまちづくりにも貢献していただきたいという思いがあり、県の制度とは別の制度を立ち上げる予定としているところでございます。次に、東北公益文科大学修学制度でございます。こちらは、市の職員を対象にした人材育成の取り組みでありまして、市の職員のままで大学の授業を受けることができる修学制度を設定したところでございます。来年度採用者のうち1名はこの制度により、公益大の方で授業を受けることになる予定でございます。最後に、地域と連携した人材育成の取り組みでございます。(1)につきましては、先ほど申し上げました大学まちづくり地域政策形成事業で、今年度実施した合宿形式のセミナーを引き続き実施をすることで、ここに掲載しておりますけれども、酒田東高校が文科省のスーパーグローバルハイスクールの採択に向けて取り組んでいるところでございます。その後押しという意味合いも込めまして、引き続き実施させていただくことにしております。ただ、昨年度同様、他の高校の生徒の皆さんも参加される予定でありますので、対象を酒田に限定することなく実施してまいりたいと考えているところです。(2)につきましては、後ほど教育委員会から詳細な説明があると思いますが、義務教育課程の教育委員会、県の高等学校、それから高等教育機関である公益大といったこの3者が連携しながら人材育成の取り組みを高められないかということで施行していくものでございます。今後、酒田市としましても、大学とさらなる連携を進めてまいりたいと考えておりますし、大学側におきましても、地方創成の中、地域づくりという観点からも、より現場の方に、学生が出ていただくとともに、卒業後、酒田のために頑張って地域に対して貢献していただくことを期待して

いくところがございます。以上でございます。

(管理課長)

教育委員会管理課長の桐澤と申します。私からは、総合教育会議資料2の教育委員会(学校)と東北公益文科大学との連携についてご説明をさせていただきます。この事業につきましては、新年度の取り組みといたしまして、教育委員会(学校)と大学の連携方策を探るための研究委託を公益大にお願いするものでございます。これまでも社会教育部門では公益大との連携により事業を行ってきております。資料右下に記載しておりますが、これまでの社会教育部門での取り組みとしては、社会教育課が中心となりまして、市民大学講座、出前講座といったものを開催したり、市立図書館の図書を公益大のメディアセンターで借りることができたり、あるいは、市立図書館のカードを公益大のメディアセンターで作成することができたりなど、人的な面やそれぞれが持つ共通の機能の面で連携を図ってきております。新年度は、新たな取り組みといたしまして、学校教育部門で公益大の持つ知的資源を活用して連携が図れないか、実践活動を行いながら連携方策を探っていきたいと考えているところがございます。具体的な実践活動としては、現時点での案として、3つの取り組みを予定しておりますが、今後とも関係者と協議しながら進めていくものでございます。1つ目といたしまして、中学校の放課後を利用して公益大の学生が中学校の生徒の学習支援を行う。2つ目といたしまして、平成27年度に初めて行い好評だった夏休み、宿題お手伝い教室。これにつきましては、退職された小中学校の先生方が中心となって今年度行っておりますけれども、来年度そこに学生がサポート役として入っていけないだろうかということです。3つ目といたしまして、英検3級を目指す中学生を対象に、夏休みなどを利用して試験の事前対策を行う、このようなことを検討しております。また、全国の大学で取り組んでおります連携事業を調査していただくほか、実践活動を通して関係性ができた関係者とともに、取り組み内容の効果や課題を検証するとともに、さらなる大学連携の可能性といったものを探っていただくといったところで考えているところがございます。その上でこの研究報告を受けながら、今後の事業化に向けていきたいと考えているところがございます。

(学校教育課長)

教育委員会学校教育課長の今野です。よろしくお願いたします。私からは総合教育会議資料3の教育支援員充実事業についてご説明いたします。近年、特別支援教育に対する必要性というのは高まりがありまして、どの子にも支援をしながら輝く、そのような子どもたちを育てていきたいと進めているところです。この事業のねらいは、通常学級及び特別支援学級における個別の支援を要する児童生徒の学習効果を高めるとともに、集団への不適応状態にある児童生徒の学校生活へのよりよい適応を図るために、教育支援員を学校の実態に応じて派遣するものであります。校長会からも、教育支援員については大きな要望を寄せられているところでした。教育支援員の業務内容は、学級担任等の指導の補助、そして個別の支援を必要とする子どもたちへの学習指導の補助、それから生活支援、そういったこととございます。資料では、これまでの教育支援員の配置人数の推移を示させていただきました。当初は、学習支援員ということで学習での支援といったところから始めたのですが、子どもたちには、学習のみならず学校生活すべてで支援が必要であるということから、名称を教育

支援員とし、支援の幅を広げて進めているところです。緊急雇用の制度も活用させていただきながら、事業を進めてきているところですが、例えば、平成 25 年度から平成 26 年度にかけては、教育支援員の人数が 45 人から 40 人と減っているように見えますけれども、これは、平成 25 年度までは緊急雇用の制度が活用できまして、10 名を緊急雇用の制度により配置いただいたところです。それが 26 年度からその制度がなくなったことから、35 名になるところですが、市当局からご覧のように予算をつけていただきまして、平成 15 年度からトータルで考えると少しずつですが、増やしてもらってきていました。そして今回大幅に増やしていただける、そのような状況になっております。今年度の成果について学校からの報告によりここに記させていただきましたけれども、授業と授業の合間や昼休みなどの時間に生徒に付き添うことで、安全、安心な生活をおくることができている。それから、そばに寄り添って支援したり手を差し伸べたりすることで、児童の気持ちが安定して落ち着いて学習に取り組める時間が増えた。支援を要する子どもの課題は様々で、例えば 3 つ目につきましては、個々に寄り添って詳しく説明することで落ち着いて意欲的に学習に取り組めるようになった。自分でできる課題に根気よく取り組むようになり、意欲面に加え、学力面での成長も見られたというような報告もあります。また、集中力が途切れがちな子どもにつきましては、支援員から個別のケアをしてもらうことで、一斉での活動に取り組めるようになった。また、個々の思いを受容し活動に対する見通しを持たせたりすることで集中して取り組めるようになった。気持ちが沈んだ時やいらいらしている対象児童に対し、支援員が個別に寄り添い支援することで、自分自身の力をコントロールしながら、学習に取り組むことができるようになった。人間関係でつまづいた生徒に対し、休み時間や昼休みなど目を配りながら声かけをすることで、集団の中での生活に落ち着きがみられるようになった。特別支援学級のケースですが、学級担任の補助をすることで、通常学級と交流学习がスムーズに実施できる、あいさつや給食の準備など生活面での指導も充実し、児童の成長に結びついているなど、このような成果を報告いただいております。今後さらに効果的に活動するために、担任と教育支援員との情報共有や、支援方法の改善など、各校の工夫ある取り組みについて教育委員会を通して支援していきたいと思っております。また、事業の効果検証を行って、教育支援員の効果的な活用を進めていくことも特に意識していきたいと思っております。現在、教育支援員の研修会を 2 回実施しております。内容としては、特別支援教育に係る研修、それから教育相談、生徒指導に係る研修、教育支援員の活用に係る研修、こういったテーマでいろいろな悩みなどを出していただき、実践の具体例を示してもらうなどして、その後も学校で生かしているといった状況です。学級の中で、支援を要する子どもがいたときに、教育支援員が専属でその子を指導して、担任の先生はその他の子どもたちを指導するとそういうことではないのだと、あくまでも一緒になって、担任の先生もそういう中で指導力をつけていく、そういったことを理想としたとき、今後、教育支援員と学級担任との合同の研修会も必要ではないかと、そんなこともこれから検討していきたいと考えています。以上でございます。どうぞよろしく申し上げます。

(丸山市長)

どうもありがとうございました。予算の査定という作業があるのですが、おぼろげながら指示はしつつもこんなにきちんとした資料をいただいたのも初めてなので、そういう

意味でもこの総合教育会議は素晴らしい会議だなと改めて再認識をさせていただきました。こういうことをやるからと指示したことに対して、事務方の皆さんが短期間できちんと答えを出していただいたということにありがたく思っております。これから、東北公益文科大学との関係ですとか、教育支援員についてご意見頂戴したいと思います。フリートークで話し合いができればと思っているのですが、その前に、平成28年度の予算の中身については、これは皆さんまだわからないわけですね。実は一般会計という予算で、527億円という予算を組ませていただいて、過去最大、テレビを見てみると、他の市町村も過去最大と言っているのですが過去最大はあまり珍しい話ではないのかもしれませんが、私どもは2.3%対前年度比増という少し踏み込んだ予算を組ませていただきました。先ほども言いましたけれども、教育については、私もひとしきり力を入れると言ってきたので、重点項目として掲げさせていただき、教育支援員の増員ということで第一に上げさせていただいております。40人から60人ということで、2,800万円ほど予算の上乗せをさせていただいております。それが1つ。もう1つは、今日は図書館長も来ておりますけれども光丘文庫の資料についてです。やはりこれが失われるのは怖いということで、資料を今の保管先である光丘文庫から中町庁舎に移して、保全に万全を期すということで、そのための予算として1,200万円ほど上げております。もう1つは公益文科大学の支援の関係で定住促進のための事業です。奨学金の返還支援制度ですけれども、先ほど企画振興部長から説明ありましたが、これで540万円ほど新規の予算をつけたところであります。重点項目というのも10項目上げさせていただいているのですが、そのうち3項目ほどは教育委員会の関連でございます。それから、図書館の移転の話もありますが、駅前の酒田コミュニケーションポートという施設の中にライブラリーセンターという名称ではありますが、図書館機能をもった公共施設の移転を考えております。それについてはこれから基本設計という作業に入っていくので、その部分の予算というのは900万円ほど見込んでいるのですが、やはり教育振興にかける予算については、私としては相当踏み込んだ予算にさせていただいたと思っております。例えば小学校と中学校のトイレの洋式化、これはやはり未整備のところはやっていかなければならないので、設計をしてから改修となるので2か年になるのですが、その設計費用について小学校、中学校ともに1校ずつ盛りさせていただきました。それから、皆さまにもご苦労をおかけした松山地域の統合小学校の関係です。これは、29年度と30年度ですね、事業予算が出てくるのはそこからですが、それでも準備活動の経費は位置付けさせていただいております。そのようなものも含めて教育委員会所管の予算については、かなり踏み込ませていただいております。詳細はまた機会を見て事務局からご説明があるかと思っておりますけれども、そんな状況の中での今回この東北公益文科大学との連携、それから、教育支援員の充実事業の3点について今説明をいただいたところでございました。あとはあまり肩の凝らないような話でいいのでまたフランクに話をさせていただければと思いますが、その前に1つだけお話をいたします。昨日東北公益文科大学の理事会がございまして、私が副理事長にもなっていることから出席させていただいたのでありますが、酒田地域の高等学校からの入学者が少ないという話になりまして、ちょうど鶴岡市長も同席しておったわけですが、こういう実態なのだというので説明がありました。今現在で合格が出ているのは鶴岡地域からは32名とおっしゃっていました。しかし、酒田地域からは4名なのです。これはどういうことなのか。確かに地域の皆さまの公益大学に対する見方そのものを改めていかなければだめなのかなということでこう

いう事業をやるのですよと説明してきたのですけれども、やはり私としては、来年度は二桁になるよう努力をしますと理事の皆さまに釈明をしてきたところでありました。そういったことも含めて、公益大との連携というのは、小学校中学校の時代からこのような大学が地元にあるのだということを見据えて啓発をしていかなければならないと思います。それは子どもたちだけでなく親の問題、それから事務担当の教員の先生方への働きかけをもっともっと強めなければだめなのではないかなと思っていますところでもあります。先ほど公益文科大学コワーキングスペースアンダーバーの話もありまして、昨日の夜そのアンダーバーで市長と語る会というのがあったのですけれども、そこで若い人たちと少し議論をした中でやはりこういう問題が出てきました。どうも鶴岡の若い人たちの方が元気だというような話になって、要は酒田の人がそうなのですけれど、公益大がとか地元に戻ってくるとか、地元で仕事をするとかそういった意識をもつ子どもたち高校生がいなきゃだめだと思います。そのためには、地域とか親とか進路指導の先生方の頭が変わらないと、生徒さんがそういう頭にならないと思いますのでそういう人を育てていく。そういった意識をもつ人を1人でも多く育てていくということが基本なのですと若い人たちが話をするのです。すごい人だなと思って、私も全くその通りだと思いますということで話をしてまいりましたけれども、そういう意味では、教育支援員の充実もそうですけれど、公益大との連携の事業についても、そういう風土をつくっていくために非常に有意義な仕掛けになるのではないかなと思っていますところでもあります。そんなことも少し情報としてお話をさせていただきながら、自由にご意見をいただきたいと思います。副市長からも遠慮なくお話をいただければと思います。どの項目からでも結構でございますし、それ以外の新年度の予算の絡みでも結構でございます。公益大がらみの話でしたので國眼先生いかがでしょうか。就職とかそういう担当もされていたと思いますので。

#### (國眼委員)

自分が所属している大学なので、なかなか申し上げにくいのですが、今市長がおっしゃったように酒田地域からの入学者が少ないというのは、私どもも非常に気になっているところです。実際、最近本学の院生が山形県内で行った調査によれば、高校生の進路選択に対して、これは進学も就職も含めてですが、最も影響を与えているのは、やはり圧倒的に保護者、中でも母親でした。私の世代ですと、高校生くらいになりますとかなり友達の影響も受けたように思うのですけれど、現在は圧倒的に親のようで、親の半分以下の割合で友達が選ばれているという結果でした。この結果から引き続き、保護者への働きかけ、公益大というのは酒田市の中でこういう役割を果たしているのだということ、もう少しお伝えする努力を私どももしなければならぬのだろうなと思っています。ただ単に高等学校の進路指導の先生へ働きかけるだけではなくて、もっと身近に一市民としての保護者とのかかわりを持つ必要があるのだろうと思います。義務教育の小学校や中学校ですと市内の小中学校をおたずねしてPTAの方ともお話をする機会があるのですが、大学を選ぶ段階の高校のPTAとの接点がほとんどないという状態なので、直接なかなか働きかけられない歯がゆさがありますけれども、設置主体がどこかということを超えて、幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校そして大学というその流れの中で、ご理解をいただけるようにしていかなければいけないと思います。またあくまでキャリア支援の立場から言いますと、残念ながらまだまだ庄内地域、特に酒田が大学生の就職の受け皿となる企業がやや乏しいかなという気がします。実際に今

までの卒業生を 11 回卒業させているのですが、今年度はそれらの学生が就職した企業、特に 2 名以上採用いただいている企業を訪問して調査をいたしました。その結果、企業の規模が 49 名以下の小さな企業が庄内地区では多いのですけれども、それらの企業での離職率が非常に高い。300 人～500 人規模になりますと離職率が急激に減るという現象が見られました。おそらく人数という数字だけでなく、入ってからの研修、支援といったところが地元の企業ではやや手薄なのかなと思います。大変おこがましい言い方ですが、入社後の研修や育成にもう少し時間と手間をかけてやっていただけるとありがたいと感じています。一企業だけでやるのではなくて、この地域の企業が連携してやるかたちでも結構ですので、若い人材を育てていく、伸ばすという発想をしていただくと、彼らも育て安心してこの地域で生活していく、貴重な人材になりうるのではないかと感じているところです。

(丸山市長)

はい。公益大学の連携ということで、意見を頂戴したいと思いますけれども、皆さまどうでしょうか。ご意見ございましたら。

(浅井委員)

私は小学校が主だったので、小学校の点からお話しますと、小学校といっても 12 歳ですよ。そうすると大学受験が 18 歳ですので 6 年しかないのです。小学校が私は侮れないかなと思うのですけれども、小学生の子どもたちだって、公益大といったら公益ホールがあつてというイメージを持っております。公益ホールでは時々行事があるので、そこには子ども達はいくのですよね。ですので、公益大イコール公益ホールがあるところみたいな感じかと思えます。大学の方は知らないというような子どもたちが多いのではないかなという気がします。低学年の子どもたちだと、大学があること自体もおそらく知らなんじゃないかなとそんな程度の認識しかないのかなと思っているのです。公益大が開学したのが 2001 年でしたでしょうか。2001 年か 2002 年のころに、私も大学近辺の小学校に勤務していたものですから、大学ができた、これはと思って連携とまではいかないのですけれども、子どもたちに大学はこんなところだよと知らせることが大事と思い、その当時公民館に常勤の市職員などもいましたので相談し何かできないかと考えて、学習バスを使って公益大に 6 年生を連れて行き、施設の見学や教室で説明を受けました。大学の概要ですとか授業の一部を教えてもらった気がするのですが、そんなことを実施いたしました。それからその後に大学の文化祭があつたのですが、そこでも何かできないかということで、大学の学生のサークルが来てくれて、みんなの前でステージをやってくれました。そうしたら拍手喝さいで、非常にうけたということがありました。そのようなささやかな実践のようなことをやったのですけれども、その次の年にはその学校を出てしまったので続いていったかどうかはわからないのですが、小学生の小さいうちから大学の存在自体を知らせる、このような大学もあるのだということも、ささやかなことではあるのだけれども大事にしていきたいと思っております。今はそんなことはほとんどないのかなという気もするのですけれども、もし、大学が邪魔でないのであれば、そのようなことも大事にしながら、進めていくことも大事なのかなと思います。

(丸山市長)

そう意味では、今回教育委員会で放課後学習支援だとか、夏休み、宿題お手伝い支援だとか、小学生、中学生を対象に公益大学の学生さんを巻き込んだ形で事業展開をすることとしております。どちらかと言うとまだ試行なのですけど、反応が良ければ拡大できるかなと思ひまして、そう意味では非常に面白い事業、これも吉村学長がそういった話がありましたので、ちょっと仕掛けさせてもらったのですけれど、面白い企画だなと私も思っていたのですね。英検のプロジェクトは高校生、中学生でしょうか。これも公益大というものが身近な存在にもっともっとなつてもらって、就学の魅力の対象になつてもらえればありがたいなと思ひつています。齋藤委員いかがでしょうか。

(齋藤委員)

冒頭に市長から大学の喫緊の課題と申しますか、そのようなお話もしていただいたわけですが、公益大学の最近の印象と申しますか、このようなソフト面での施策というものを行政も真剣に考えていただいているのだと近年感じておりました。先ほど浅井委員からお話ありましたが、設立当時は地域交流的なものがあつたというようなお話も若干聞いたことあるのですが、それがちょっと薄れてきて、行政でどのような対応をしているのかなというところが見えなかつた部分が一時期あつたような感じがしてました。それが近年、このような形で地域に対してどのような形で行政の働きかけができるのか、また、大学の先生方も地域に対してどのような取り組みをできるのかということを実際にといたら大変失礼な言い方になるのですけれども、ソフト面での取り組みというものを考えていただいているというのは、酒田は変わってきたかなという感じを受けておりました。ただ、ようやくスタートしたなということでもありますから、これからこの成果が出てくることなのでしょうけれども、その過程という意味では非常にありがたいと思ひつております。先ほど酒田からの進学者が少ないということもありましたが個人的に考えますと、鶴岡ではある意味行政の成果という言葉は悪いですけど、1つの売りというような考え方で先端科学の開発などいろいろなことをやっているわけです。当然地域の方にとってそれは1つの誇りであると思ひます。ある程度地域の方々に見えるような形で何か成果を出していかないと、なかなか地元の保護者の方々は公益大学に進学していいのかという感覚がぬぐえない部分があるのかなと思ひます。そういう意味ではそれを払拭しようといういろんな取り組みするのは素晴らしいことだと思ひます。例えば義務教育課程の中で、大学のありようというものをどのように発展させていくのかと考へた場合、地域住民との信頼関係が今以上に密にならなければならないと思ひます。限られた時間の中でやるというのは非常に難しい部分があるのでしょうけれども、いま少し長く時間をかけていただいて、熟成する感覚というものを見ていただければ大変ありがたいなと個人的には思ひつております。

(丸山市長)

確かに自分も市役所の内部にいて行政の視点としてはなかなか目立つ動きは取りきれてなかつたかなと大学にみんなお任せというところがあつたのかなと思ひます。定員に達しないという状況が続く中で、行政として特に酒田は、國眼先生や副市長もよくご存じですけど、大学まちづくりということで大学と一緒にまちづくりをやる、まちも大学を支えるのだとい

うフレーズで大学をつくったわけですから、出来てしまっただけから少し淡白だったかなという思いももっておりまして、副市長や市長になって加速度的に何かしないと、自分がそういうポジションにいる意味がないなと思ったものですから、今いろいろあえて、大学側からの提案をベースにしたものですか、自分たちで考えたものですか、どんどん投げかけております。事務方が一生懸命企画してくれたので、非常にありがたいなと思っているのですが、これがホントにどういう効果が出たか検証することが大事であって、これがすべての特効薬になるわけでもなく、検証の仕方といいますか、そういったものもきちんと研究しないといけないし、検証結果を市民の皆さまに知らしめて、この大学で学ぶということの意義をもっともっと強めてもらう必要があるなと思います。先ほども出ました英検のプロジェクトだとか、あるいはグローバル・セミナーだとか、いろいろなことをやられているわけですが、教育委員会ではばたき事業などもやっていますが、そういったメニューを通過していった子どもたちが、将来どういう人生を歩んでいくのかというところを、私はデータとしてほしいなと思っているのです。外交官になったとか、あるいは国の第一線で活躍しているとか、そういうものがきちんとデータとして示せば、こんなに素晴らしい事業、素晴らしい大学があるのだということで、誇りを皆さまから持ってもらえるし、そうすると進学しようという気にもなってもらえる。親御さんもそうですけれどもなってもらえるのではないかなと思っています。その辺はこれからしっかり考えていこうと思います。では岩間委員何かございますか。

(岩間委員)

はい、私も親の目線と企業目線で2つ感じるところがあって、親としてお金をかけて進学させた先で何を学んで、そこで学んだものをどう生かして大人になっていくか、大学の4年間を自分の生涯として生きていくうえで、子どもたちに一番影響力があるお母さんの言葉というのは、私自身も親としてやはり勉強不足かと思いました。公益大で何が学べて、どんな知識を得て社会人となることができるのかというところ、私もやはりよくわかっていなかったところがありまして、公益大の良さを親世代が理解し、いい学校だから進学するといいいよといった会話が家庭の中でできれば、今のような数にはならないと思いますし、小学校中学校の家庭での会話からそういった良い影響ができれば良いと思います。そして、あつたかいお母さんのご飯を食べながら、生活しながら社会人になることができるのだよというところをもっともっと親も学んでいく必要あるのではと思いました。実際上の子が高校2年生で来年進路を選択するわけですから、そこは親として子どもの希望を優先してあげたいのですが、将来はやはり酒田に帰ってきてほしいなと思います。就職してしまったら、都会の良いところばかり見えてしまって帰ってこなくなるかもしれませんが、酒田にいるときに酒田の良いところをもっと教えてあげていつかは帰ってきたいなというそんな種を植えてあげることはすごく大事だなと思っています。それから、公益大への入学予定者で鶴岡の方が32名もいるところ酒田が4名は悲しいなと思いますし、地元の人が一番わかっていないということであれば、どうしたら皆さまに公益大のことを知ってもらえるのか、私自身も、どうしたら知ることができるのだろうかという疑問に思います。浅井委員もおっしゃっていましたが、大学に訪れる理由がホールで催しがあるときぐらいしか足が向かないという状況ではもったいないと思います。大学で学べることを知る機会をもっとあったらいいのではと思

ました。中原先生のゼミで私も去年1年間青年会議所の関係で活動させていただいたのですが、学生が酒田市の文化のいいところを探索して、おもてなし隊という活動をしているという事で、活動していた酒田出身の女子学生が、自分は酒田が嫌いだった、何もいいところがないと思っていたけれどその事業の中ですごくいいところを知って、気持ちが入り替わって良かったというようなことを言うておりました。そういったことをいろんな人に経験してもらいたいと思います。私自身もそう思って一度酒田を離れ帰ってきたのですが、よそに行ったときに自分の街のいいことを言えなかった恥ずかしい経験があったものですから、子どもと一緒にいるうちにそういった良い経験をさせてあげたいと思っております。

(丸山市長)

お母さんたちにそういう意識をもってもらうには何をやったら良いのでしょうかね。なかなか悩ましい話ですよ。私は、お母さんとかお父さんとかおじいちゃんおばあちゃんが関わっていく教育事業というもどのように組んだらいいのか考えます。これは社会教育課が所管するかと思いますが、今日ここに上がっている事業については基本的にはすべて子どもたちに対するものですよ。地域の人たちに対する働きかけとしての教育事業を考えていかなければならないのかなと思います。機会があれば皆さまからご提言いただければと思います。公益大の関係で絞り込みましたけれども、副市長何かありますでしょうか。

(矢口副市長)

私も一週間前までおりましたので言いにくいのですが、いろんなレベルの連携があるなと思って、なかなか整理できていないのですが、教育委員会（学校）との連携ということで今までもいろいろあったかと思いますが、28年度に新たな連携ということが予定されていて、また、おもてなし隊の話も出ましたが酒田まちづくりと大学との連携、これは最初の資料1にいろいろありました。それから、市長がおっしゃりましたように、公益大に酒田から入学する人が少ないのをなんとかしたいというのは私も同感で、皆さま応援して下さって大変ありがたいなと思っておりました。私も大学におりましたので、きびしめのことを言うと大学自身が選ばれる、他の大学ではなく公益文科大学自体が選ばれる大学になるように努力はしてきたのですが、更に一層努力をしてご理解いただくことが一番で、お願いして来てもらうようなことではないと思うのです。そこはさらに大学にも頑張ってもらいたいと思います。親御さんの意識改革というと大変おこがましいのですが、そういう意味では今回の市長が発言されました、酒田市の職員が通うという制度、これは大変市民の方にも関心が高く、意識改革といいますか、公益大がいい大学なのだということを理解していただくのにこの制度は大変貢献しているのかなと感じを受けました。それから、入学者を増やすことの延長線になるのですが、私は常々自分自身が大学を出て社会人をやりまして、そのあと大学院に戻ったという自分自身の経験があるものですから、大学というのは18歳の若い人だけを対象としたところではないだろうと考えております。社会教育でいろいろな出前講座もありますし、4年間学部の授業あるいは大学院の授業でもいいですが、普通に社会人が入学して学べる場所であってほしいと願っております。公益大もそのように公開講座というだけではなくて、社会人が、例えば高校を卒業して銀行に勤められた方が、経済学をきちんと勉強したことがなかった、近くに大学があるから行ってみようということで、経済学だけ科目

を履修するなど、そういう意味で開かれた大学、普通の市民が勉強したいと思う時に通える大学になってもらいたい。そうすれば自然に社会人つまりは保護者の理解も進むでしょう。そのためには大学が社会人に堪えられるだけの教育内容で運用しなければならないと思います。先生方が頑張って大変レベルの高い教育をしてくださっていますので、そういうところも拡充していただけたらありがたいなと思います。

(丸山市長)

教育長から最後のまとめとありますが、今の段階で何かありますか。

(村上教育長)

まず非常に個人的な話からなのですが、公益文科大学の魅力というのは私の中では公益というこの言葉ですね。そのインパクトが非常に強いのです。私は内容を勉強したわけでもないのですが、酒田にできる大学が公益という名前を冠しているというところに非常に何か新しい、これからの単に教養を学問的に深めるだけでなくそれをどうしていったらいいものかというそういう視点を学べる大学といったようなそういう印象を受けているのです。この公益という考え方をどうやったら全国に広められるかというのは当然なのですが、まず酒田がそれを感じることができるかというところが私にとっては1つのポイントとなっております。まずはそこからだけ考えますと、公益とは何ということや学生自らが伝達したり、自分なりの考え方で人に広めたりする活動、あるいは連携の中心にあると思うのです。今たまたま、例えば、ちょっと宿題を見てくれないかとか、勉強を教えてくれないかというのは、1つの手段でありますけれども、公益を勉強している学生自身と膝を交えて相談したらもつと違うことを言うかもしれない。政策は1つのきっかけとしてここから始めるにしても、では次のステップは何を使用するのか、できるのかと考えるのか。それはたぶん公益のものの考え方に基づいている可能性が高く、そうすると、公益をもとにした義務教育の段階での交流というものを考えたときには、話が非常に飛んで申し訳ないのですが、酒田の第三中学校の生徒が地域に出かけて行って、自治会長と話をし、俺たち何かやれないかという相談を始めて、それが根付いているのです。公益大の学生がその第三中学校の三コミ活動をフィールドにして研究した場合、なぜこんなことができるのかという研究論文、卒業論文を書いてくれるとしたら相当面白いものを書いてくれるに違いないと私は思っています。このように義務教育の児童生徒と先生、一方では地域という生のフィールドがあり、そこに公益の考え方を何かしら実現していくプロセス、そこに公益大生自らがアシストするということです。これができれば何と誇らしい市だろうなという夢を私は描いているという状況なのです。でもまずはこちらからのニーズとして宿題を見てくれないか、英会話もちょっと鍛えてくれよというのはあると思います。でもやはり、公益大生の本当にやってみたいこと、それは公益そのものを核として公益を実現していく体験を児童生徒に味あわせること。そこに絡んだら、絡んでいる姿を地域住民が見て、公益の面白さや良さ素朴なのだけれど非常に良いと、そういうことを地域住民が感じる。そのような地域づくりに、絡んでくれると面白そうだなという考えです。

(丸山市長)

そういう絡める仕掛けをする、そういう機能を果たす窓口がなかなかないのですよね。昨日もアンダーバーでの若い人との話で、地元就職をするというテーマの話ですけれど、やはりいろんな意見とか活動とかを地元の企業の社長さんと交換する機会がなくて、雇用されている方の頭の切り替えをするような、そういう場があるともっともっと意識改革が地域に浸透するのではないかという話になったのですけれど、先ほどのお母さん方や地域も含めてですけれど、そういう場づくりに少し行政としても、これは教育委員会というよりも地域を巻き込む地域をターゲットにするとすれば、やはり市長部局の責任かなと思いますけれど、そういう場づくりにちょっと力を入れていきたいと思っておりますので、ここは少し企画振興部長に頑張ってもらおうと思っております。ただ、お母さん方への意識改革という面では社会教育なので、教育委員会、教育部長からまたしっかりコントロールしていただきたいなと思っております。ありがとうございました。大変参考になる話が聞けたと思います。あともう1つ、時間も限定されるので申し訳ないのですけれど、教育支援員の関係ですね。こちらについてまた意見ございましたらお聞かせいただければと思います。先ほど学校教育課長から狙いや効果、成果などきちんと説明がありましたので、特に学級担任の先生との合同研修というところなんかは、これから力を入れていただければ、相乗効果として子どもたちの生活指導を含めていい効果が出るのではないかと私は期待をしているのですけれど、皆さんいかがでしょうか。

(國眼委員)

では、よろしいでしょうか。

(丸山市長)

はい、國眼委員お願いします。

(國眼委員)

こちらの配布資料で、教育支援員の人数が当初は2名だったものが60名へとこれだけ飛躍的に増えてきたという事実を目の当たりにして、一人一人を大切に支援する教育が着実に進められてきていることが分かり感慨を新たにしているところです。是非今後ともこの取り組みにますます力を入れていただきたいと思っております。先日学校教育課長にお聞きしたところによると60名でもまだ足りない、実際にはもっとニーズがあるという話をお聞きしました。やはり今、何年生だからこういう課題があるとか、このクラスの子はこういう特徴を持っていると一概に言えない状況、つまりクラスの中に非常に多様なニーズをもった子どもがいるという現状があると思っております。少ないと10人15人というクラスもあるのですけれども、多いクラスでは1クラス35名程度の生徒、児童を指導される先生もいらっしゃるわけですから。そういう中に何人かある程度の支援や配慮を必要とする児童生徒がいますと、なかなか全体の指導が難しいと思っております。教育支援員と学級担任とがチームプレイを図りながら、是非この事業を継続してほしいと思っております。特にニーズはこれからますます増えていきますので、教育支援員の研修にも力を入れていただきたいと思っております。

(丸山市長)

ありがとうございました。学校教育課長もっと必要だということですが 60 名で大丈夫でしょうか。

(学校教育課長)

1.5 倍なので、これ以上はおしかりを受けるかと思っていました。

(丸山市長)

子どもたちも少なくなっている現状ですが、以前 40 名の時には、70 名くらいは必要だと言われていたような気がするのですけれど、今國眼委員が言われたことはしっかりと予算付けしますので、ちゃんとやっていきたいと思います。他にございませんでしょうか。

(浅井委員)

教育支援員配置数の 1.5 倍増、予算額にして 2,800 万円の増ということで、本当に学校ではちょっと考えられないようなことで先生方は大変喜んでいるのではと想像しているところです。ただ、これが今後も継続的に更に 70、80 となっていくか、そこまでは無理だと思うのですけれども 60 名に増やしてもらって学校現場としても非常に助かる方が多いのではないかと思います。学校教育課長に前もお訪ねしたのですけれども、これだけ増えてくると人がいるのかどうかということが心配になってくるのですね。広報でも募集しておりましたし、各学校の校長先生方もいろいろ探すのですけれども、誰でもいいというわけではないものですから、ある程度子どもたちが好きだとか、子どもたちと関わるのが好きだとかでない、教員免許は関係ないですが良い人材を確保するということが大事にしないといけないと思っております。

(丸山市長)

ありがとうございました。私もそれが一番気になっていましたが、教育委員会事務局から大丈夫だと太鼓判を押していただいておりますので、それは大丈夫だろうと思っております。さて、企画振興部で進めている生涯活躍のまち構想というものがあるのですが、どういう事業かと言いますと、首都圏で第一線をリタイアした人たちからこちらに移住定住していただける環境をつくりたいと思っているものです。まだ基本的なものが固まっているわけではないのですけれども、例えばこの学校の先生で退職されて第 2 の人生を送ろうとしている方々が自分が今まで得てきたノウハウを教育支援という形で、この土地で第 2 の人生で活かしてほしいと、そういう生きがいを提供できるということも首都圏からこちらに移り住んでもらうときの決断をしてもらう 1 つのきっかけになるのではないかなということも考えております。そういう意味では、ここに今いる方だけではなくて、他から来る方も巻き込んだ形で教育支援員の人選や募集などをできれば、リタイア後も活躍できるということがある意味生きがいになるのではと思ひ、その 1 つの要素として教育支援員として活躍できますよということも、売りになるのではないかなというほのかな期待をもちつつ、生涯活躍のまち構想、CCR 構想といわれておりますけれども、それを組み立てていければなと思っております。

(齋藤委員)

ほんとにありがたい施策であると感じております。教育支援員、学習支援員という制度が始まる平成15年度あたりから私も学校関係にいろいろ携わる機会を持つようになって、学校にお邪魔する機会が増えてきたのですが、一保護者として学校に行った時の印象というのが、すごく先生方忙しいという印象を受けました。例えば、我々は仕事が終わってから学校に行くわけですが、そういった時でも先生方が職員室でいろいろ事務仕事をなさっております。なんでこんなに遅いのだろうと考えておりました。その当時から先生方にもっと何かご協力できることはないのかとお話をした時もあったのですが、今から考えると、この当時からいろいろと問題を抱える子どもたちが、普通教室の中に入ようになってきているという状況があったようでした。ですから当然このような制度ということも国も県も考えていただいたのだとは思いますが、そういった課題に対して行政より枠を広げて対応していただけるというのは大変ありがたいことではないのかなと思うのです。資料にも効果、課題等いろいろ書かれていますけれども、確かに先ほど市長が言われたようにこれがどういう成果につながるのか検証することは非常に難しいのですが、個人的な考え方を言わせていただければ、少なくとも子どもたちにはいい影響は必ず与えると思います。ただ、これを数値化するのは非常に難しいので、究極のところは前回の話題にもなりました学力の問題に必ずつながっていく問題だと思うのです。各学校に教育支援員を配置することによって、ある程度今まで目が届かなかった子どもたちに先生方の目が届くような状況が出てくるわけですから、それは、今まで以上に小学校中学校の成長段階にある子どもたちに合わせた対応ができるということだと思いますので、非常にありがたいと思っております。ただ、どうしても、この成果という点を市長がどのくらいのスパンで見ただけなのか懸念するところであって、ある程度の期間がなければなかなか成果が見いだせないと思います。先ほども申し上げた究極の成果の1つとして、やはり学力の向上だと思うのです。その究極の部分については成果を出すまでにこの施策を長い目で見続けていただければありがたいと思います。長い目といっても少なくとも3年から5年といった縛りはかけざるを得ないと思いますけれども、是非お願いしたいと思っております。

(丸山市長)

その点についてはしっかりと承りました。先ほど企画振興部長からも説明ありましたけれども、酒田市のまち・ひと・しごと創生総合戦略が28年度から5か年の計画ですし、酒田市教育振興基本計画後期計画も31年度までということですから、やはり5年くらいは、ましてや生身の人間に対する教育活動の成果ということであれば、一定程度期間を置かないと成果を押し量れないと思っておりますので、そのようにぜひ考えていきたいと思っております。総務部長もどうぞよろしく申し上げます。ただ、酒田市では28年度から更なる保育料の負担軽減にも取り組むことにしており、教育支援員の充実とこの2つで2億円以上かかるので、効果があることはわかるのですが、懐具合としてはきついのです。しかし、この予算を削れない、削らないように他にちゃんと財源の穴埋めをできるように、産業振興に力を入れて税収を上げていく、そうすれば十分補えるわけですので、そういった循環を考えていきたいと思っております。とにかく、この事業はしっかりと目玉としてこれからも大事にしていきたいと思っております。

(齋藤委員)

我々も市の財政を目にする機会は多々あるのですが、その中でこのような施策を提案していただけるというのは大変ありがたいと思っております。その中で十分そういったことは認識しております。後ほど教育長からもお話があるかと思いますが、この件でちょっとお話をさせていただきました。

(丸山市長)

ありがとうございました。この流れからすると当然岩間委員からも一言いただかないと。

(岩間委員)

先ほど市長からお話がありましたけれども、保育料の負担軽減についてですが、自分も産休明けからすぐに預け働いてきたものですから、保育料の負担軽減はとてもありがたい事だと思っております。女性が自立して縛られずいきいきと働いて、子育てをして、その働く姿を子どもに見せればきっと子どもも働くことは素晴らしいと思うのではないのでしょうか。私も母親がずっと働いており、預けられて育ったのですが、自分自身寂しく親を恨めしく思いませんでしたし、保育園の先生も大好きで。自分自身親になって預けて働くことに迷いはありませんでした。幼児期の体験が大切で今の私の土台になっていると思います。このようにしていただけることはすごくいいことだと思いますし、酒田の子どもたちが大人になったときに社会を支えられるよう原石を磨いて、素晴らしい大人にするためにも今はお金をかける時期なのかなと思いますし、雇用する立場からも後押しをしていきたいと思えました。

(丸山市長)

副市長から何かコメントありますか。

(矢口副市長)

おっしゃるとおり 40 人が 1.5 倍というのは行政の中では大変ですし、先ほど保育料の負担軽減と合わせて酒田市の売りだと思しますので、私も副市長として酒田の特徴にしていきたいと思えます。

(丸山市長)

それでは、ある程度皆さまからご意見をいただきました。これも含めて、教育長からまとめをいただければと思います。

(村上教育長)

まとめにはならないのですが、様々なご意見を交わすことができうれしいなと先ほどから思っていたところです。公益大生のお話の続きと今の教育支援員のお話を接続しますと、私、学校に勤めておりました時に、公益大の生徒に教室に入らせていただいて、お手伝いをしていただいた経験が若干ございます。丸山市長が P T A 会長をなさっていた学校でございまして、良くおぼえておるのですけれども、そういった時どういことがおきるのかと言いますと、公益大生が 3 年 1 組に担当クラスとして入ってくると、例えば子どもの点数の

丸付けをお願いしますということもできるのですが、今のお話のように、LDやADHDという知的にはなにも遅れはないのですけれども、ある分野だけはとても理解するのに時間がかかるお子さんがいることがあります。その時に、公益大生が来た場合大抵どういうことがおきるかという、まず担任の先生と公益大生の間でいろいろ情報交換するのですけれど、特に子どもの様子について情報交換します。その時、一番大事なスタートは、その公益大生からA君という例えばLDの子がいたとして、A君はどのような子なのか理解してくださいということからスタートしないと成り立たないのですね。一緒にチームが組めないということです。つまり、児童生徒を個別にその子を深く理解するということが極めて重要だと私は思っているのですけれど、それを行いつつ、少し教育活動の支援をしていくという姿勢が求められているとことです。そうすると、ちょっと公益大生は引くのですね。でも、今日の前に子どもがいるので一緒に遊んだりもしますし、この子はちょっとこういった理解の仕方をしがちなのだとか、こういうところがわかりづらくなっているのだなというようにだんだん理解する。それだけで、そのようにして見ている人が脇にいてだけで教室は変わっていく。絶大な効果をそこで生もうというようなミッションのような動き方をあまりまず意識しないで、児童生徒を深く理解するということです。そこが、非常に大きな教育活動といってもいいのではないかなと思うのですね。それで、60名になった支援員のお話になるのですけれども、必ず役割を意識して入ってきてくださると思うのですが、あまり焦るとしなくてもいいようなことまでやってしまったり、見ることをしないでやってしまったりというようなことが時々起る可能性があるのですね。私としては、その子どもを良く見る、子どもを良く理解する人を増やすということ、これが第一の仕事でないかなと思います。そうすると、費用対効果の話として上がりづらくなる、最初から上がりづらいのです。理解するだけで何なのといわれてしまいますので、ところが、理解した後で、この子だったならば、例えば、順序がよく飲み込めないので、先生が言ったことをカードに3つくらい書いて、そして脇でカードに書いてあげて机の上に並べてあげると、あとは動けるのだなということになるのですね。ここまで来るのも相当難しいことなのですけれども、最初から正解はないのでいろいろとやってみるわけです。どうしたらわかってくれるかということ、その子なりの方法を少し考えるわけです。まずここまでができれば私は100点満点だと思います。さらに効果を期待するとすれば、担任の先生は、この3枚のカードを使うということ、最初から全員のために黒板に張るということになります。そうするとどういう効果がでるかということ、そのLDのお子さんがわかりやすくなると同時に、他の子どもたちもわかりやすくなるのです。これが素晴らしい効果だと思うのです。そうすると、支援員の人と担任の先生がやるべき大切なことは、どうしたらこの子にも有効で、かつ全員にも有効な方法が授業方法としてありうるかということのミーティングが極めて重要になるということだと思います。齋藤委員がおっしゃった学力向上はそこでつながります。その子1人を伸ばす、これは大事な事ですが、クラス全体の授業の質が変わっていくということ、ここまでできれば200点の話かなというのが私の思い描いている効果です。反対のことを申し上げると、LDのお子さんの係はあなたですねと言って、担任の先生が離れたときに担任の先生の理解が止まる。その子についてますますわからなくなるのです。これは逆効果です。むしろ。そうではなく、先生が黒板に書いているときこの子こうしていましたと後から聴くと、その子の理解が深まって、このようにしようかということになる。効果が出るとはそういうことです。そのようなティームテ

イーシングの良い効果をなんとか少しでもいいから出していききたい、もう一度、この事業の狙いを明確にしていきたいというのが、今更ながらなんです、私のやるべきことなのかなと思っております。そのため簡単なテキストがないのかなと探しているのですが、すぐには見つからず、今一番近いのではと思っているのは、2013年に県の教育センターが出しているユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりという研究書ですけれども、ここにそのLDやADHD、アスペルガーなどの特別な障がいをもったお子さんへのアプローチの仕方が出ています。決してハウツー本ではありません。ものの考え方ですけれどもそれが出ています。この支援員の方は、それこそどんな方が来てくださるのか、経験があったり初めてだったりいろいろあると思いますので、何か私たちが一緒に勉強できるようなものを用意して研修をしながら、本当にその子とそのクラスにとって良いペアの学習を深めていきたいというのが私の希望です。そういう意味でちょっと時間もかかるかも知れませんが、難しい局面もありますけれども、丁寧にこの事業を市民の皆さまにも伝えていきたいと思っております。廊下を走って逃げて行ったからそれを捕まえる係だとか、そんなレベルでは決してないということをおわかってもらいたいと思います。

(丸山市長)

私も、そのとおりだと改めて思ったところです。そういう意味では教育支援員を拡充したということが、酒田の教育にとってプラスに作用してもらえればと思います。そのことは教育長をはじめ教育委員会の皆さまや各学校の先生方、そういった方々の努力によるところが非常に大きいのだらうなと思っておりますので、是非お願いをしたいと思っております。ありがとうございました。ひとしきりご意見を頂戴いたしました。これから動かす事業がほとんどな訳ですけれども、しっかりと皆さまの意見を受け止めながら取り組んでまいりたいと思っております。それでは、協議事項の本市を取り巻く教育の諸課題については、このあたりで区切らせていただいて、その他にうつります。これは、皆さまからその他何かあればということでもよろしいでしょうか。是非この場で意見交換をしたいという項目があれば、ご発言をお願いしたいと思います。新年度の関係では、先ほども教育長からお話ありましたとおり文化スポーツ振興課という課が市長部局にあるのですが、4月からは2つに分けて、スポーツ振興課と、文化部門は社会教育課につけたいと考えており社会教育文化課という名称で、課を組織したいと思っております。文化とスポーツも教育委員会の所管になりますので、そのことについても、委員の皆さまからは、少しアンテナを高くしていただいて、非常に大きな課題をいっぱい抱えている分野でもありますので、ご意見いただければありがたいと思っております。特にスポーツ分野ですと2年後にインターハイが酒田で開催されますし、これには高等学校が関わってくるわけですけれども、スポーツですとか体力ですとか、あるいは文化的素養についても大切な教育だと思っております。例えば今年5月24日から、日本とイタリアの国交樹立150周年を記念して、日本文化祭みたいなのがローマであるのですが、そのオープニングイベントが文化部門の所管なのですけれども、土門拳の写真展をするということになっておりますので、そういったことも含めてこの酒田の文化を広めるということも、教育委員会の役割として大きなものになってくると思います。市長部局が離れるということではなくて、これまで以上に市長部局と教育委員会が一緒になっていこうということです。これも相乗効果を狙い学校を巻き込むことで、より子どもたちに文化やあるいはスポーツに対

する意欲というのでしょうか、そういったものが養われればいいかなと思っております。そんなことも含めて新年度は行政組織の改編もありますということでございました。他に何かございますか。

(齋藤委員)

せっかく今話題を出していただきましたので、その文化というところでですけれども、本市においても観光立地という視点があるかと思えます。教育委員会においても近年では松山城址館をはじめいろいろな施設関係を整備させていただいているわけですが、今一度街の中心部にある酒田を代表するような文化施設について、観光立地化とはいかないまでも、観光客が歩ける仕組みづくりができないかなというのは常々個人的に思っております。これは教育とは関係なくて申し訳ないのですけれども、中町に屋台村をつくっております。当然そこに酒田市民や県外からの観光客の方が集まるよう施策としてやられているわけですが、これを1つの起爆剤としていろいろな取り組みをつなげていかなければと思うのです。例えば、市の指定文化財である浄福寺唐門の修繕に補助を実施しました。ああいった施設の整備を支援し、ホームページでこういった施設がありますとお知らせしてもなかなか来てはいただけないのが現実だと思うのです。ですから、そこに屋台村もセットしながら、近隣に文化財もありながら、将来的にはそこに何かちょっとした出店みたいなものも付設できるような雰囲気づくりをできるのであれば、文化施設としても有効活用できるだろうし、そこにまた地域の方々も誇りももてるだろうし、そういった施策を出していただければありがたいということを考えておりました。なかなか難しいかとは思いますが、何か年かの計画でもいいので、少しずつ行政でもこういうことをやっているのだということを見せていただければ、共感する民間の方々も必ずいると思います。誰かが口火を切らなければなかなか難しいと思います。市長もご存知のとおり、酒田市の民間の企業の状況では、そこまではなかなか厳しい部分がありますので、市の財政も厳しいとは思いますが、その辺のところを少し心がけていただければ、大変ありがたいと思います。

(丸山市長)

齋藤委員がおっしゃるとおり教育と同じくらいに観光や文化振興というのは非常に重い課題であります。観光については、中長期の観光戦略というのを今年度にまとめて、きちんとした方針のもとで観光政策を実施する組織の母体を作って、そこを中心にいろいろな仕掛けをやっていきたいと思いますという段取りをしております。そういった議論の中で、行政として街並みの整備の仕方だとか、あるいは文化を活かした観光資源だとか、北前横丁のような施設の展開ができるかとかいろいろ議論をさせていただきたいなと思っております。総合教育会議ももちろんですが、いろいろな意見を市民の皆さまからいただいて議論し、皆さまが納得するようなそういう施策の組み立てはしていきたいなと思っておりますので、これからは、この教育という分野を離れてもいいですので皆さまからご意見をいただければありがたいなと思えます。事務局も場合によっては観光の担当部長がここにもいいのだと思いますので、そういう仕掛けも来年度組めましたらよろしくお願ひしたいと思えます。それでは皆さまありがとうございます。一定の時間が経ちましたので、意見交換につきましては終了させていただきたいと思えます。では教育部長お願ひします。

#### 4 閉会

(大石教育部長)

皆さまどうもありがとうございました。本日の総合教育会議を今年度最後の会議とさせていただきますと思います。新年度になりましたら改めて事務局より具体的な開催時間、協議事項等連絡を申し上げますのでよろしくお願いたします。これもちまして平成27年度第3回酒田市総合教育会議を閉会いたします。